

# 北海道伊達高等学校

課程 全日制  
 学科 普通科  
 生徒数 456名

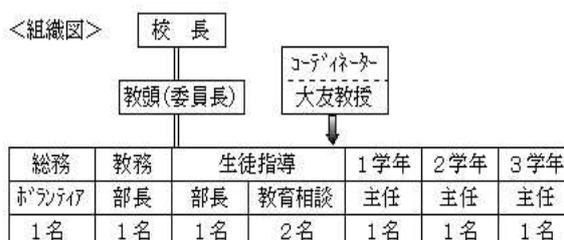
## 1 取組の特徴

きめ細かな集団カウンセリングやボランティア活動などの体験的な学習を展開し、生徒の人間関係を形成する能力やコミュニケーション能力を高めるとともに、自己有用感を育成するための指導の一層の充実を図る。

## 2 取組のねらい

- 1 これまでの取組の組織化・体系化
- 2 「ほっと」の実施と結果のより効果的な活用と、教育相談活動の充実

<組織図>



## 3 取組の経過

- |  |   |
|--|---|
| <p>4月 集団カウンセリング<br/>(1学年 宿泊研修)</p> <p>5月 「学級環境適応調査」の実施<br/>(アセス：全学年)</p> <p>8月 第1回ボランティア活動(希望生徒)</p> <p>10月 第1回ピアサポート活動(希望生徒)<br/>生徒理解のための事例研修(教員)</p> <p>11月 第2回ピアサポート活動(希望生徒)<br/>「ほっと」実施(1学年)</p> | <p>12月 異世代交流(3学年)<br/>第3回ピアサポート活動(希望生徒)</p> <p>2月 第2回「ほっと」実施(1、2年)<br/>雪まつりボランティア活動(2学年)<br/>第2回ボランティア活動(希望生徒)</p> <p>3月 集団カウンセリング(1学年)<br/>第3回ボランティア活動(希望生徒)</p> |
|--|---|

## 4 取組の内容

### 1 宿泊研修における集団カウンセリング

- (1) 日時 4月20日(金)
- (2) 対象 1学年生徒
- (3) ねらい お互いを認め合い温かな人間関係を形成するための取組を通して、望ましい集団づくりへのきっかけとする。
- (4) 内容 個人+グループ+クラス単位によるエクササイズ  
(自由歩行、ボディじゃんけん、空飛ぶじゅうたん、話し合い、全員ハイタッチ)
- (5) 成果
  - ア 「楽しくできた」「ためになった」「友達の意見をじっくり聞けた」「自分の意見を伝えられた」などの事後アンケートの項目に対して、肯定的な感想が、いずれも8割を超えた。
  - イ 楽しいだけでなく、話をしたことのない生徒同士の交流が深まるなど、友人関係づくりのきっかけとなった。
  - ウ 本校教員がコーディネーターとなることにより、生徒の実態を踏まえたエクササイズを実施することができ、より効果を高めることができた。



## 4 取組の内容

### 2 ボランティア活動

- (1) 日時 8月25日(土)
- (2) 対象 希望生徒及び教職員(参加者:生徒25名、教員4名)
- (3) ねらい
  - ア 自主的な活動を通して、自主性、社会性、コミュニケーション能力を育む。
  - イ 体験活動により、自己有用感を高める。
  - ウ 思いやりに満ちた関係を築くきっかけをつくる。
- (4) 内容 学校前の市道街路樹の花壇整備
- (5) 成果
  - ア 人間関係を広げる場として有効であった。
  - イ 活動を通して、達成感・成就感を味わうことができた。



### 3 異世代交流

- (1) 日時 12月11日(火)～12月14日(金)(クラス毎)
- (2) 対象 3学年生徒
- (3) ねらい 高齢者との交流を通して、コミュニケーション能力を育成や自己有用感を高める。
- (4) 内容
  - ア 本校での実施～輪投げ、パークゴルフ、合唱など
  - イ 施設での実施～レクレーション、テーブルゲーム、合唱など
- (5) 成果
  - ア 次第作り、役割分担、贈り物製作、合唱の練習等、準備の段階から当日まで、今までとは違い、協力して真剣に取り組む姿が多く見られた。
  - イ 個々の生徒が持つ良さを発見することができた。
  - ウ 人のために尽くすことで、クラス全体が笑顔に包まれ、達成感を共有することができた。
  - エ 高校生活の締めくくりとして、コミュニケーションの大切さを改めて実感する機会となった。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- (1) 生徒支援ツール「ほっと」の結果(1年生)
 

高い項目	1学年	低い項目	1学年
	SS		SS
挨拶や感謝	50.5	賞 賛	47.2
リーダーシップ	49.1	思いやり	47.3
発言や説明	48.9	自 律	47.7

  - ア 人懐っこく、褒められたりすると前向きに取り組もうとする反面、他人に興味がなく、自己中心的で規範意識の希薄さなどが特徴として挙げられる。
  - イ クラスの特徴が分かりやすく、学年部会や教科担任会議の参考資料として活用することができた。
  - ウ 生徒一人一人の個票を、個に応じた生活指導や進路指導にも活用することができた。
- (2) その他の指標による評価
  - ア ボランティア活動への参加生徒の増加及び活動の継続(のべ人数H23年度206名 H24年度311名)
  - イ 保健室利用者数の減少(のべ人数H23年度1,511名 H24年度1,250名 1月末現在)
- (3) 生徒の変容した姿
  - ア ボランティア活動への参加意識が高まり、自主的なサークル活動が継続している。
  - イ 生徒が企画立案し、協力して取り組む活動(学年レク、3学年異世代交流など)を通して、学年進行とともに、他を思いやるクラスづくりが進んでいる。

### 2 課題

- (1) 体験的な活動を通じた成就感・達成感によるコミュニケーションスキルの向上や学校不適應の一層の防止を図る必要がある。
- (2) ステップアップ推進委員会とサポート委員会及び生徒指導部の教育相談係との連携を密にした学校組織の構築が必要である。

### 3 次年度に向けて

- (1) 体験活動のプログラム化と「ほっと」を活用した定期的な調査を行い、その結果を生徒との個人面談に活用して生徒理解を深める。
- (2) 本校生徒の「意欲」を高める観点からの、本実践の各取組と他の取組との系統化を図る。